# フィールド(現場)からの風 ⑫

宮田守男

## 地域資源を守り抜く意識が 大切な事だと考えてみませんか

8月上旬、安曇野市豊科県民運動広場で開催された女子ソフトボール大会の審判として参加した。バックネット裏の審判員の話題は、周辺の山々、松枯れ被害の話題だ。松本市周辺は、マツタケの産地、皆、今後の拡大に関心がある事が分かる。松は、本州以南の各地に広く分布、古来より、和歌や日本画にも数多く登場し、親しまれている樹木だ。

しかし40年代にアメリカから輸入された松材とともに長崎に上陸したと考えられる松くい虫被害は全国に拡大し、平成15年度の被害は、全国43都道府県に及び、被害樹木は25万にも達している。「松くい虫」が存在するわけでなく、マツノマダラカミキリが運ぶ線虫「マツノザイセンチュウ」が松の幹に入り込み、枯らすとされている病原体が介在する厄介な病気だ。

防除法は、7月～9月の産卵期前の松林への農薬散布が効果的な一つの方法なのだが、森林区域に新しく居を構えた住民からは、空中防除への賛同は困難との話が審判員から聞かれる。有人・無人ヘリコプターによる農薬散布は、対象の虫ばかりでなく、全ての虫に、そして残留農薬は、人や飲み水にも影響し、全国各地でも実施場所は限られていることも事実だ。

しかし森林資源で生活を営む関係者がいる状況を話しても、「財産家の資産を守るために健康や自然を奪って良いのか」、「松林は造林で作り出した自然、本来の広葉樹の山に」などの声に、対策の一致点を模索するのは困難と嘆く姿が強く心に残る。本州で唯一、松くい虫被害が発生していないと報道される青森県。積極的に、国・県・自治体・地域住民が一体となった被害の未然防止に取り組む現場があると聞く。私たち大北地域でも被害防止への関心が高まってほしい。

しかし、そのマイマイガの行く先が気になってしまう。何とか来年に向けて減らそうと、産み付けられた一つの卵塊を取り除くたびに、「500匹の駆除」・「500匹の駆除」・「今日は、合計で5万匹の駆除だ」と自分に言い聞かせる。地域の中で、多くの住民が駆除する姿に数多く出会うとなぜかうれしくなる。

虫の被害では、昨年から悩みが多い。話題は、もちろん「マイマイガ」だ。昨年も、コラムに話題を提供したが、マイマイガの生態のすごさには驚かされる。フリー百科事典「ウィキペディア」によると、ドクガ科に分類される蛾(ガ)の一種だ。別名ブランコケムシと呼ばれ、風に吹かれるなどして、かなりの広域を移動する森林害虫だ。

約10年周期で大発生を繰り返し、その際すざましい個体数と旺盛な食欲であらゆる草花・樹木を食い荒らす現状は、すでに私たち地域でも見受けられている。一部では天敵ウイルスで自然に治まるとの情報も聞くが、実際、人為的に天敵ウイルスを散布しても、個体は激減せず、連なる山々の木々が丸坊主にされた現場が北アメリカに実在するのだ。ヨーロッパから北アメリカに養蚕を目的に人為的に移入し、被害が拡大した、世界の侵略的外来種ワースト100(IUCN 1000)の選定種とされる害虫だと認識すべきだ。

本年も各地で大発生。飛騨高山市では、盆踊りやお祭りが相次いで中止に追い込まれ、外国人旅行者の困惑したコメントがテレビ情報で伝わってくる。私たち地域でも対策が取られ始められている。自宅前の街灯がLED化すると、あれほど乱舞した姿は全く姿を消すほどの効果。

個人的な取り組みや、場当たり的な対応でなく、地域全体として、防除のあり方を検討しているとありがたい。一例だが、樹木の幹に布や寒冷紗などを巻き付け、虫を集めて駆除する方法が効果的だとの情報も簡単に入手できた。皆で寄せ合った知恵を期待したい。

今年も、春先の山々の一部の緑が極端に寂しくなる場所が気になり聞くと、マイマイガが犯人と教えてもらう。被害が、数年続くと樹木が枯れてしまうのでは心配になる。自然が売り物の大北地域、関係者の自然資源を守る意気込みの弱さが気になる。ここは、行政、個人の部分は個人が…。

本当にこれで良いのだろうか。失ってしまった自然の回復は困難極まりない。地域を挙げて皆で対応する事態だと本気で考えてほしいと願ってやまない。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)

大糸線新田踏切電柱に産み付けられた卵塊の駆除、施設管理者任せで良いのだろうか